

# 国府尾城跡活用整備の検討にかかる報告書

令和5年6月

隠岐の島町教育委員会



## 序

平成 30 年度より開始した国府尾城活用整備事業は、この度報告書をまとめ一定の方向性を見出すことができました。今回の調査では、国府尾城とそのほかの町内の山城、国府尾城を居城とした隠岐氏の様相の一端を知ることができました。そして、この離島地域においても戦国時代の戦乱の波が押し寄せ、各地域において勢力の興亡があったことが明らかになりました。

国府尾城跡は、本町の歴史を語る上では欠かすことのできない遺跡であり、また、ここを居城とした隠岐氏の家臣団の子孫が住む地域が今に残ることから、地域の誇りとしても忘れられることはありません。国府尾城跡の調査・活用・整備についてはその緒についたばかりですが、今後調査を重ねることにより遺跡としての価値を高め、調査の成果を踏まえた整備を行い、更なる魅力アップを図りたいと考えております。

末筆になりますが、この間、隠岐の島町内外の委員の皆様をはじめ、オブザーバーの皆様に多大なるご協力を頂きました。誠にありがとうございました。今後も引き続き国府尾城跡に関する事業にご協力、ご参加いただけますと幸いです。

令和 5 年 6 月

隠岐の島町教育委員会  
教育長 野津 浩一

## 例 言

1. 本書は平成 30（2018）年度から令和 5（2023）年度に隠岐の島町<sup>コウノネジョウ</sup>国府尾城活用整備事業検討委員会を調査主体として実施した、国府尾城跡の活用整備にかかる調査・検討事業の報告書である。
2. 本書に掲載した主な遺跡の所在地は下記のとおりである。  
国府尾城跡 島根県隠岐郡隠岐の島町港町
3. 本文 3 頁の第 2 図は「色別標高図（国土地理院）」を加工して作成した。また、7 頁から 25 頁の縄張図とともに掲載した縮図は、「電子地形図 25000（国土地理院）」を加工して作成した。
4. 調査は下記の体制で実施した。調査については、検討委員会内に現地調査部会および文献調査部会を設置し、部会員と事務局が中心となって調査にあたった。

隠岐の島町国府尾城活用整備事業検討委員会（当初は隠岐の島町文化財活用整備検討委員会）

### 【検討委員会委員】

※所属は令和 5 年 4 月時点

名 前	所 属	部 会	備 考
中井 均	滋賀県立大学名誉教授	現地調査部会	調査指導
高屋 茂男	八雲立つ風土記の丘所長	現地調査部会	調査指導
倉恒 康一	島根県文化財課世界遺産室専門研究員	文献調査部会	調査指導
毛利 彰	隠岐の島町文化財保護審議会委員	文献調査部会	委員長：R3 年度～ 5 年度
吉田 均	隠岐の島町文化財保護審議会委員	文献調査部会	副委員長：R3 年度～ 5 年度
小室 賢治	隠岐の島町文化財保護審議会委員長	文献調査部会	
八幡 賢一	隠岐の島町文化財保護審議会委員	現地調査部会	
奥谷 壽久	国府尾神社前総代長	現地調査部会	

### 【オブザーバー】

常角 敏（委員長：H30 年度～ R2 年度）

仁木 聡（島根県教育庁文化財課：H30 年度～ R2 年度）

田原淳史（島根県教育庁文化財課：R3 年度～ R4 年度）

今福拓哉（島根県教育庁文化財課：R5 年度）

### 【事務局（隠岐の島町教育委員会）】

教 育 長 ：村尾秀信（H30～R1）、野津浩一（R2～R5）

社会教育課長：吉田隆（H30～R1）、野津千秋（R2～R3）、中村恒一（R4～R5）

文化振興係長：曾我部一彦（H30～R2）、小中静（R3）、野津哲志（R4～R5）

調 査 員 ：松田隆志（H30～R2）、野津哲志（R3～R5）、岩崎ことい

調査補助員 ：永海佐

## 【本文目次】

### 第1章 事業概要

第1節 事業の経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第2節 事業の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

### 第2章 国府尾城跡の周辺環境

第1節 国府尾城跡の地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

第2節 国府尾城跡の歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

### 第3章 国府尾城跡に関する調査の概要

#### 第1節 現地調査

(1) 国府尾城跡及び城館跡の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

(2) 隠岐の島町内に所在するその他の山城跡の調査・・・・・・・・・・ 10

(3) 現地調査のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26

(4) 現地調査における今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27

#### 第2節 文献調査

(1) 国府尾城に関するこれまでの調査研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28

(2) 個別の資料調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30

(3) 文献調査のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41

### 第4章 まとめ

#### 第1節 調査結果に基づく評価

(1) 現地調査部会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45

(2) 文献調査部会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45

#### 第2節 国府尾城跡の文化財的価値

(1) 旧隠岐国最大の山城・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

(2) 中世の石垣が残存する山城・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

(3) 城主の居館を擁する山城・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

#### 第3節 今後の国府尾城跡活用整備に関する方針

(1) 国府尾城跡活用整備の現状・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

(2) 当面の国府尾城跡活用整備計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48

第4節 総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49



## 第1章 事業概要

### 第1節 事業の経緯と経過

隠岐の島町内の中近世城館跡については、古くから文献資料などによりその存在が知られていた。平成5年度からの5年間に島根県教育委員会主導で行なわれた県内の中近世城館跡の分布調査では、町内で山城跡と考えられる遺跡が数多く確認された。中でも、国府尾城跡は中世の隠岐を治めた隠岐氏の居城として隠岐地域の歴史を語るうえで欠かすことができない遺跡であり、文化財的価値の高さからその重要性は知られるところである。

平成26年、隠岐の島町は国府尾城跡を含む城山一带を町民からの寄贈により所有することとなり、所在する遺跡の保存および活用についての検討を開始した。隠岐の島町教育委員会では、隠岐の島町文化財活用検討委員会（平成31年に国府尾城活用整備事業検討委員会に移行。以下、両検討委員会を区別なく検討委員会という）を設置し、国府尾城跡の調査、活用方法の検討を開始した。

### 第2節 事業の目的

この事業では、国府尾城跡を中心に隠岐の島町内の山城の総合的な調査、活用方法の具体策の検討を行い適切に保存整備することを目的とした。この報告書では本事業におけるこれまでの調査成果や、今後の活用・整備の方向性に関する検討結果をまとめる。

第1表 事業の経過一覧

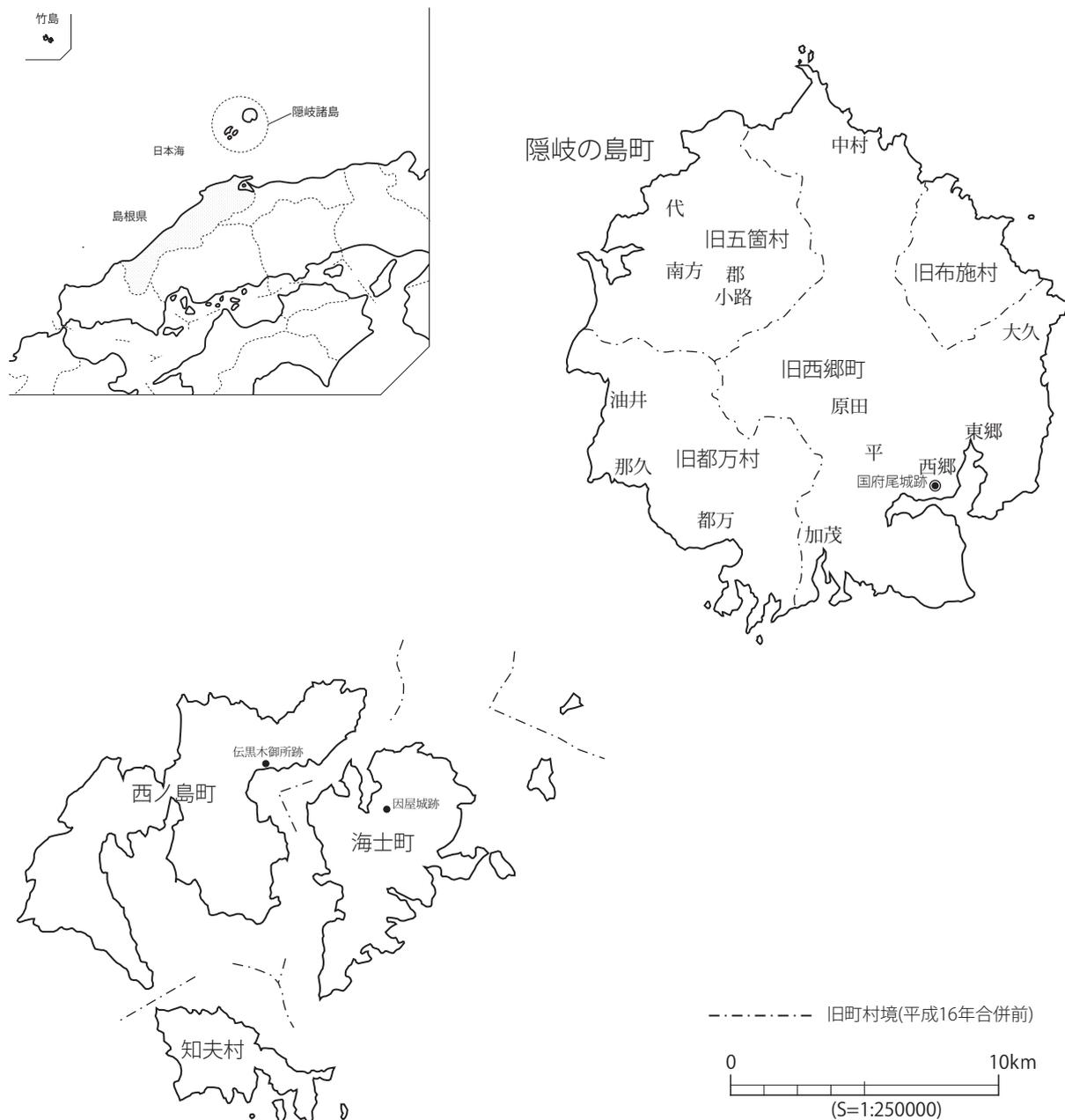
年月日	事柄	備考
H30.8.21	検討委員会	事業立ち上げ、目的・主旨の確認
H30.11.13	検討委員会	全国山城サミット参加報告、講演会の開催協議
H31.2.23	検討委員会	委員会名・委員任期の変更、目的の変更
	講演会	演題「隠岐の中世山城」中井均委員
R1.7.11	検討委員会	高梨氏城跡視察報告、今後の計画確認
R2.2.28	検討委員会	中止（予定を変更して部会を開催）
R2.2.29	講演会	中止（演題：隠岐の城、出雲の城）
R3.8.31	検討委員会	事業経過の確認と今後の事業計画
R4.3.28	検討委員会	調査報告、次年度計画、報告書の内容
R4.7.20	検討委員会	調査と調査成果の整理、今後の事業スケジュール、中間報告書について
R5.1.6	検討委員会	中間報告書の内容確認、講演会の開催について
R5.3.21	講演会	演題「古文書から探る隠岐の山城と隠岐氏の歴史」倉恒康一委員
		演題「山城からみた隠岐・戦国乱世」高屋茂男委員
R5.3.22	検討委員会	中間報告書の内容確認
R5.5.25	検討委員会	中間報告書の内容確認
R5.6.10	検討委員会	中間報告書の内容確認
	講演会	演題「出雲の城・隠岐の城」中井均委員
R5.6.11	現地説明会	国府尾城跡現地説明会

## 第2章 国府尾城跡の周辺環境

### 第1節 国府尾城跡周辺の地理的環境

国府尾城跡は、島根県の隠岐諸島に所在する。隠岐諸島は、島根半島の北方40～80km離れた日本海上にある離島であり、4つの有人島と大小180余の無人島から構成されている。有人島のうち南西部の中ノ島、西ノ島、知夫里島の3島が島前<sup>ドウゼン</sup>、北東の1島が島後<sup>ドウゴ</sup>と呼ばれている。現在は、中ノ島の海士町、西ノ島の西ノ島町、知夫里島の知夫村、島後の隠岐の島町の3町1村で隠岐郡を構成している。

島後は南北約20kmのほぼ円形の島であり、島の中央北寄りの東部から西部にかけては、最高峰大満寺山(608m)をはじめとし、500m級の山々が連なる。これらの山系を水源とする南東部の八尾川沿いと北西部の重栖川沿いには大きな平野が形成されている。

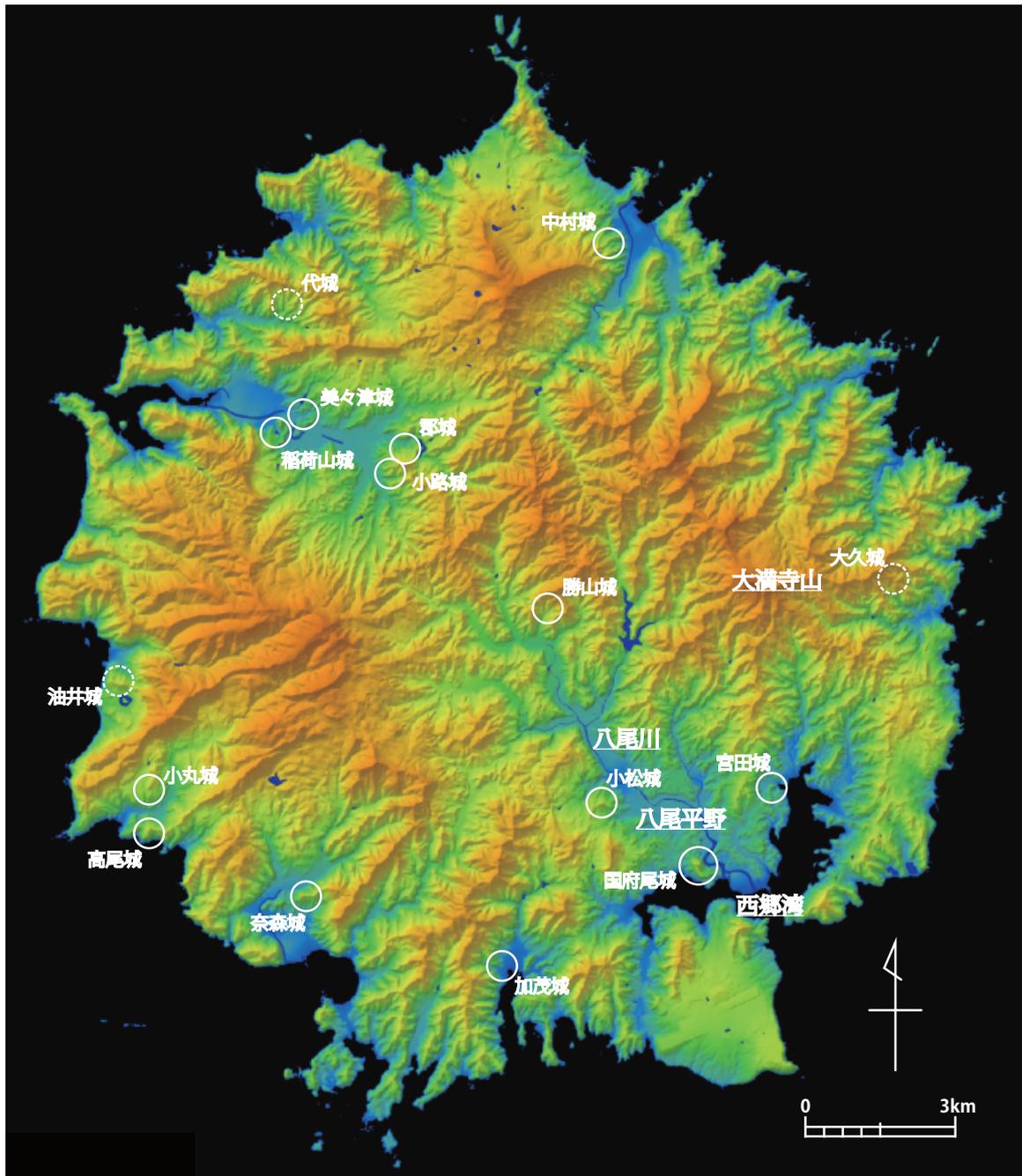


第1図 国府尾城跡の位置

国府尾城跡は、島後の隠岐の島町の八尾平野南東にある国府尾山（123m）<sup>コウノオサン</sup>の山頂から南南東へ延びる尾根筋を中心に造作がされている。国府尾山の北東から東にかけては八尾川が流れていることから急峻な地形となっており、南部は西郷湾が入り込んでいるためこちらも急峻な地形となっている。国府尾城は水利のある天然の要害の地を選び設置されたと考えられる。

## 第2節 国府尾城跡の歴史的環境

鎌倉時代以降の隠岐は、近江源氏佐々木氏との関係が深くなる。源頼朝の譜代佐々木定綱が、建久4（1193）年に地頭として隠岐国を拝領して以来、隠岐は佐々木氏



第2図 隠岐の島町内の山城

の伝統的支配地となる。隠岐の島町中村地区で行われている県指定無形民俗文化財の「武良祭風流」<sup>ムラマツリフリュウ</sup>は、定綱の本国近江国から日月の神々を勧請して始められたと伝えられている。また、佐々木氏がこの時代に西郷湾の北東部最奥に面する東郷に宮田城<sup>クンダ</sup>を築いたといわれている。

中世の隠岐において特筆すべきこととして、後鳥羽上皇、後醍醐天皇の配流がある。承久3（1221）年5月の「承久の乱」により後鳥羽上皇の隠岐国配流が決定され、同年7月には、わずか数名の供廻りの者と共に、海部郡苅田郷（現海士町）の行在所に着き、この時から没するまでの19年間を隠岐で過ごしている。この間に多くの和歌を詠み、『隠岐本新古今和歌集』や『遠島御百首』などの和歌集が編まれたとされる。延応元（1239）年2月に上皇は波乱に富んだ60年の生涯を閉じ、現在はその行在所跡と火葬塚が残されている。

また、元弘元（1331）年に起こった「元弘の乱」では、後醍醐天皇が隠岐に流され、このときの行在所跡は現在の隠岐国分寺境内に、国指定史跡「隠岐国分寺境内」として保存されている。しかし、行在所は、他に島前西ノ島町別府<sup>ベツブ クロキ</sup>の黒木御所であったとも考えられており、その究明は今後の課題である。

応仁・文明の乱以後、戦国大名興亡の時代が展開する。隠岐では元来、島前<sup>カサギ</sup>の笠置氏や村上氏、島後<sup>オモス</sup>の重栖氏等の有力在地勢力が存在しており、彼らは、国衙在庁官人、荘園の荘官等として活動していた。佐々木氏の庶流と考えられている隠岐氏は、隠岐守護代として隠岐に在島するとともに、台頭してきた尼子氏との被官関係を結ぶことで隠岐支配の保障を得て、有力在地勢力の組織化を進めた。隠岐氏の盛衰は、尼子氏の盛衰と同一の軌道を歩んでいる。

隠岐氏の居城は八尾平野南東部に築かれた国府尾城であった。当初は東郷の宮田城を拠点としていたが、西郷湾と八尾川に囲まれた要害の地である国府尾城に居城を移した。また、隠岐国分寺から眺望できる平野西部の平地区には小松城がある。これは、国府尾城の出城と考えられており、標高132mの山頂を主郭として、腰郭、土塁、堀切などが認められる。国府尾城は天正11（1583）年に隠岐氏の内部分裂により城主不在となり落城した。現在はその遺構が国府尾山上に残っている。隠岐氏関連の山城は、他に近石地区<sup>カツヤマ</sup>の勝山城がある（島根県教育委員会 1998）。また、大満寺山中腹には、隠岐氏が国府尾城の鬼門封じのために布施側から移築したといわれる大満寺がある。

隠岐氏、吉川氏、堀尾氏、京極氏と隠岐の大名領国時代は続いたが、隠岐は寛永14（1637）年の京極高忠の没後は幕府直轄領として主に松江藩松平氏の預かり地となった。

### 第3章 国府尾城跡に関する調査の概要

国府尾城跡を含む隠岐の島町内の山城跡は、平成5年度からの5年間に島根県教育委員会の『島根県中近世城館跡分布調査』（島根県教育委員会 1998）により実地踏査がされている。それまでは、本町における山城跡についての研究は古文書を用いた文献調査による研究が中心だったが、この実地調査ではじめて踏査・測量により縄張図が作成された。なお、大久城や代城は未確認、油井城においては保存状態の悪さから縄張図が未作成、一部の城は調査できなかったことが報告されている。国府尾城跡はその中でも隠岐の主要な山城として詳細に紹介されている。島前では海士町で1ヶ所、西ノ島町で3ヶ所の山城が報告されている。

今回の事業において、現地調査では、国府尾城跡の遺構の再確認による既存の縄張図の修正・加筆を行い、その他の山城跡は再調査および所在確認調査を実施した。また、文献調査では、隠岐に関する記述がみられる中世文書の再確認と国府尾城や隠岐氏に関する中近世資料の洗い出しを行い、国府尾城に関する記述の収集・整理を行った。

#### 第1節 現地調査

本事業における調査開始の段階では、過去の調査等により16ヶ所の山城跡の存在が確認されていた。今回の調査では、過去の調査成果の再確認と新たな知見を得るため、国府尾城跡を中心とした山城跡の踏査による調査を基本とした。また、過去の調査により山城跡が確認されている箇所に加え、口伝等により山城跡があると考えられている箇所、地形図の精査により山城跡が所在する可能性がある箇所についても調査した。なお、既に縄張図のあるものについては調査結果を基に修正および加筆を行っている。現地調査の履歴は第2表のとおりである。

##### (1) 国府尾城跡及び城館跡の調査（第2表中 No.1）

###### 1) 国府尾城跡の立地と概要

国府尾城跡は西郷湾北岸に位置する。城域の北東側から東側にかけては八尾川が流れている。主郭は国府尾山山頂（標高123 m）の曲輪と考えられ、南南東に延びる尾根上に規模の大きい曲輪が2箇所確認できる。山頂の曲輪は約500㎡で、北西側の段下にも同規模の曲輪が2段ある。山頂の曲輪の北西隅には虎口が設けられており、南の段下に切られた堀切には井戸も確認されている。その他、尾根上にある2箇所の曲輪の周囲、特に東斜面には腰曲輪や堀切、土塁、井戸、国府尾神社旧社家村上家の住居跡などがある。また、国府尾山北西の山麓には、堀切や土塁をもつ土壇が築かれており、隠岐氏の居館跡と考えられている。

###### 2) 今回の事業における調査

今回の調査では、過去に作成された国府尾城跡の縄張図を基に現状確認を行い、未確認の遺構や国府尾山西面の平坦地の調査、石垣の残存状況、居館跡の確認を行った。過去の調査では、曲輪や堀切、井戸などが確認されており、今回の調査でも遺構を確認す

第2表 国府尾城跡及び隠岐の島町内の山城跡一覧（灰色塗りつぶしは未確認の山城）

No.	名称	地域	縄張図	遺構	調査日
1	国府尾城跡	西郷	○	郭、竪堀、堀切、虎口、居館跡	※第3表のとおり
2	宮田城跡	東郷	○	郭、堀切、竪堀	今回未調査
3	小松城跡	平	○	畝状竪堀群、3重土塁	R3.11.10、R3.11.17
4	中村城跡	中村	○	郭、堀切、土塁	R2.2.29
5	勝山城跡	原田	○	郭、虎口、土塁	R3.11.10、R3.11.17
6	大久城跡	大久		未確認	R3.11.1
7	加茂城跡	加茂	○	いくつかの削平地、竪堀	R2.5.15、R3.1.20、 R3.2.20
8	油井城跡	油井	△	3ヶ所に削平地	R3.11.10、R3.11.16
9	小丸城跡	那久	△	郭、土塁、石垣、虎口	今回未調査
10	高尾城跡	那久	○	郭、堀切、竪堀	R3.2.12、R3.11.16
11	奈森城跡	都万	○	郭、竪堀、堀切	R3.2.12、R3.2.20
12	郡城跡	郡	○	数段の削平地	R3.2.12
13	小路城跡	小路	○	山頂に削平地	R3.1.25、R3.2.19
14	代城跡	代		未確認	R3.2.12
15	稲荷山城跡	南方	○	郭、竪堀、堀切、土塁	R3.2.12、R3.2.19
16	美々津城跡	南方	△	消滅	—

第3表 国府尾城跡の調査履歴一覧

調査日	調査者	調査内容
H31.2.24	中井、常角、毛利、小室、八幡、吉田、事務局	居館跡、ジンギさん、石垣の確認
R1.11.11	常角、事務局	ジンギさん、石垣の有無、未確認の尾根の踏査
R1.11.14	常角、事務局	国府尾神社社家村上家の住居跡に関する聞き取り
R2.2.4	常角、八幡、事務局	住居跡、竪堀、石垣の有無
R2.2.28	中井、高屋、八幡、常角、仁木、事務局	古城ヶ鼻の確認
R3.2.19	高屋、常角、八幡、事務局	遊歩道設置予定地の確認
R3.9.24	隠岐の島町長、事務局	国府尾城跡の活用整備にかかる検討のための現地視察
R4.3.28	高屋、事務局	居館跡の詳細確認、石垣が残る箇所 の再確認
R5.1.16	高屋、八幡、事務局	ジンギさん

ることができた。

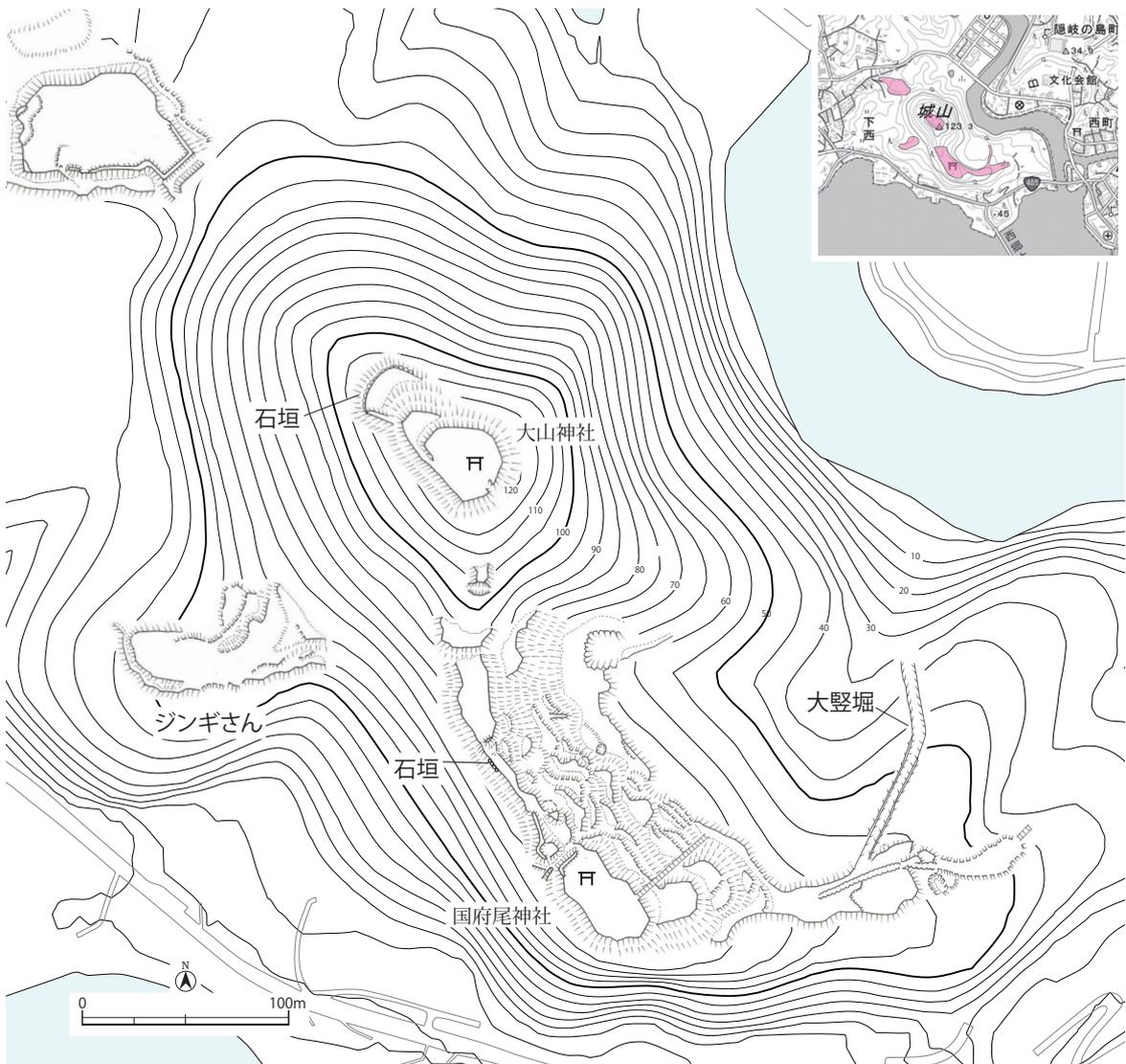
今回の調査の中で確認した新たな遺構としては、国府尾山南東から上がる参道の北側に延長約 100m の大豎堀を確認した。国府尾山西面では一定規模の平坦地を確認した。この地は地元でジング（神祇か）さんと呼ばれている。石垣については、山頂の曲輪周辺や山頂へ向かう山道の西側、大豎堀の北端に確認した。

#### ①北側の大豎堀

大豎堀は、国府尾山南東から国府尾神社へ続く参道の途中から北北東に延びる尾根筋で確認された。幅は 6～7m 程度となる。直線で 70m ほど北北東方向に延び、その先は北北西方向に屈曲し 30m 先が末端部となる。末端の両側は雛壇状の狭い平坦面が数段あるが、山城に関わる遺構かどうかは不明である。豎堀の西側は切り立っており、東側は堀った土を土塁状に盛ったものとみられる。深さは現状で 2m 程度であること

第 4 表 国府尾城跡の遺構一覧

過去の調査で確認された主な遺構	今回の調査で確認された主な遺構
曲輪、土塁、石垣、堀切、豎堀、虎口、井戸、居館跡	大豎堀、曲輪（ジングさん）、石垣



第 3 図 国府尾城縄張図

から、機能していた時期には4～5mの深さがあったと考えられる。

国府尾山北側は麓に八尾川が流れるため急峻な地形となっており防御は十分であり、さらに緩斜面となるこの位置に国府尾城跡最大の豎堀を施していることから、中心的な山城において徹底した防御が意識されたということが分かる。

大豎堀の末端部、雛壇状になっている平坦面に一部石垣とみられる石積みが確認された。ただし、現地の状況から後世の土留めである可能性が高い。

## ②国府尾山南西面の平坦地

国府尾山南西面に約20m×60m程度の平坦地を確認した。この平坦地は、『西郷町誌上巻』（西郷町誌編さん委員会1975）では、北西山麓の曲輪と同様に中世館跡であると指摘されており、当時は付近に中世墓地とみられる箇所もあったようである。なお、『島根県中近世城館跡分布調査』（島根県教育委員会1998）では、縄張図に示されていない。また、平坦地の東端には小祠を1基確認した。小祠は石積みがされた土台の上に設置されており、高さ60cm、幅40cm、奥行30cm。中にはご神体など何もない状態であった。この祠は石製であり、国府尾神社の北にある社家村上家の墓地に設置されている祠と同様のものである。

この平坦地は、当初は曲輪であると考えられたが、縁辺が段状になっており山手側に堀切がないなど、山城の曲輪とは考えにくい。近年の改変により形状の変化があったことも考えられるが、現状では確実に曲輪とは判断できない。

## ③石垣

過去の調査で、国府尾城跡には石垣が残る可能性が指摘されたため、各所において確認を行った。石垣の残存箇所は、第2図のとおり合計2箇所である。

### ア 山頂の石垣

山頂の北側の曲輪に石垣が残存する箇所を確認した。現地の状況から、曲輪周辺の土留めを目的とした石垣であると考えられる。

### イ 山頂に向かう山道の石垣

国府尾神社の裏手にある比較的大規模な曲輪の西側斜面には、10mの範囲に石垣の跡が確認された。山頂の石垣と同様に土留めを目的としたものと考えられる。



画像1 国府尾山山頂の石垣

## ④居館跡

居館跡については、現状確認のため調査を行った。平成29年の山根正明氏の報告では、居館跡の曲輪の北西隅と南西隅に土塁状の段が造られていることが報告されており、この段についても確認を行い、山根氏が調査を行った際と同じ状態であることを確認した。

### 3) 今回の調査結果を踏まえた国府尾城跡に関する所見

国府尾城跡は、これまでも数多くの踏査が行われたと考えられるが、今回の調査でも新たな遺構が確認されたことから、今後もさらに調査を重ねることでその性格や内容の詳細が明らかになると考えられる。

今回新たに確認された遺構について、まず大豎堀は、旧隠岐国最大の山城にふさわしい大規模な防御施設であった。町内のその他の山城ではこれほど大規模な遺構は確認されていない。国府尾山西面の平坦地については、山城に関わる遺構（曲輪）であるかどうかは判然としない。

石垣については、今後発掘調査を行う際に、埋土の除去、写真撮影、図面の作成等を行っていく必要がある。

居館跡については遺構の残りも良く、城が機能していた当時の状況を色濃く示している可能性が高い。今後発掘調査などで詳細を把握する必要がある。

## (2) 隠岐の島町内に所在するその他の山城跡の調査

### 1) 宮田城跡 (第2表 No.2)

#### ①立地と概要

宮田城跡は、西郷湾東湾のもっとも奥まった標高 60m の低山に所在する。かつてはこの山の北側まで湾が入り込んでいたといわれており、北東方向を海に接した要害の地であった。鎌倉時代に入り隠岐の守護となった佐々木氏の居城と考えられており、隠岐最大の港である西郷湾を望む位置に設置され、規模は小さいものの防御施設を伴った要害として一定期間利用された。15 世紀後半（文明年間）に隠岐守護代の居城が国府尾城に移ったのちも、国府尾城の出城として利用されたと推定され、尼子勝久の隠岐逃亡の際には宮田城に滞在したともいわれている。

これまでの調査では、山頂とその南南西の山腹に曲輪が確認されており、さらにつづく南南西の尾根筋には堀切が確認されている。小字名は「七掘」であり、この地に城があったことを示す。

そのほか、堀切の北西には 1,000㎡程度の平坦地があり、居館跡と推定されている。

#### ②今回の調査

今回の事業において踏査は行っていないが、島根県城館調査以降に確認された遺構があるため、改めて現状の縄張図を掲載する。

#### ③今回の調査結果を踏まえた所見

宮田城は、規模が比較的小さいが、隠岐ではもっとも初期に設置されたと考えられている中世山城であり、隠岐の中世史においては特筆すべき山城跡である。

第5表 宮田城跡の遺構一覧

過去の調査で確認された主な遺構	今回の調査で確認された主な遺構
曲輪、堀切、居館跡	なし



第4図 宮田城縄張図

## 2) 小松城跡 (第 2 表 No.3)

### ①立地と概要

小松城跡は、隠岐最大の平野である八尾平野の北西部の愛宕山山頂（132m）に所在する。国府尾城がある西郷地区と勝山城がある原田地区の中間にあたる平地区の南西に置かれ、小字は城山。国府尾城の出城として島後の西側に対する拠点であると考えられる。また、隠岐氏の治める西郷地区と島の西側を結ぶ位置にあったことから、天文年間の隠岐氏による島後統一においても重要拠点であったとみられ、説話も残っている。

過去の調査で、山頂の曲輪と南西の尾根に 3 重土塁、南東の尾根には土塁と堀切が確認されている。また、2 条の豎堀が山頂の北西に確認されている。

### ②今回の調査

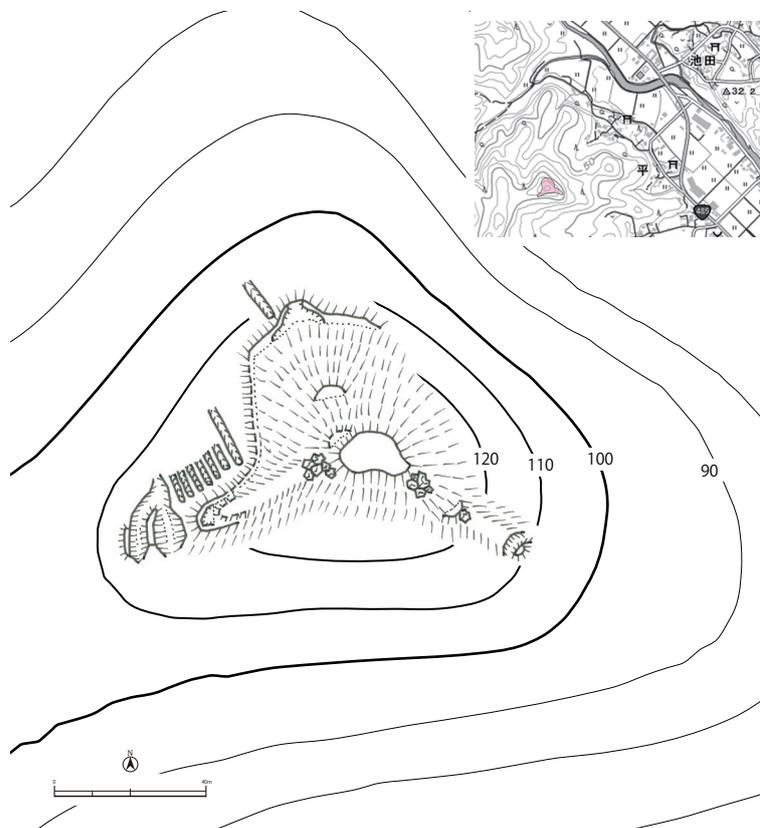
今回の調査では、山頂北西で新たに複数の豎堀を確認した。隠岐地域の山城ではめずらしい畝状豎堀群であることが確認された。

### ③今回の調査結果を踏まえた所見

西郷地域と都万地域の争いの最前線にあったとみられ、確認した遺構からみて、もっとも臨戦態勢にあった山城とみられる。特に畝状豎堀群は隠岐島内では他に例がなく、土塁と共に西側を強く意識した防御を施している。

第 6 表 小松城跡の遺構一覧

過去の調査で確認された主な遺構	今回の調査で確認された主な遺構
曲輪、土塁、堀切、豎堀	畝状豎堀群



第 5 図 小松城縄張図

3) <sup>ナカムラ</sup>中村城跡 (第2表 No.4)

①立地と概要

中村城は島後の北部中村地区に所在し、その一帯の旧武良郷に勢力を持った河渡氏の居城であったといわれている。地元で蛇山(ジャヤマ)と呼ばれる標高103mの山上に曲輪2箇所と堀切、土塁、石垣が確認されている。周辺環境は、中村川と元屋川に挟まれた沖積地帯であり、眼前には中村湾をひかえ、島後北部の五箇・原田・布施地域を結ぶ要所である。河渡氏は、天文年間の隠岐氏による島後統一の際に攻められ、滅ぼされたといわれている。

②今回の調査

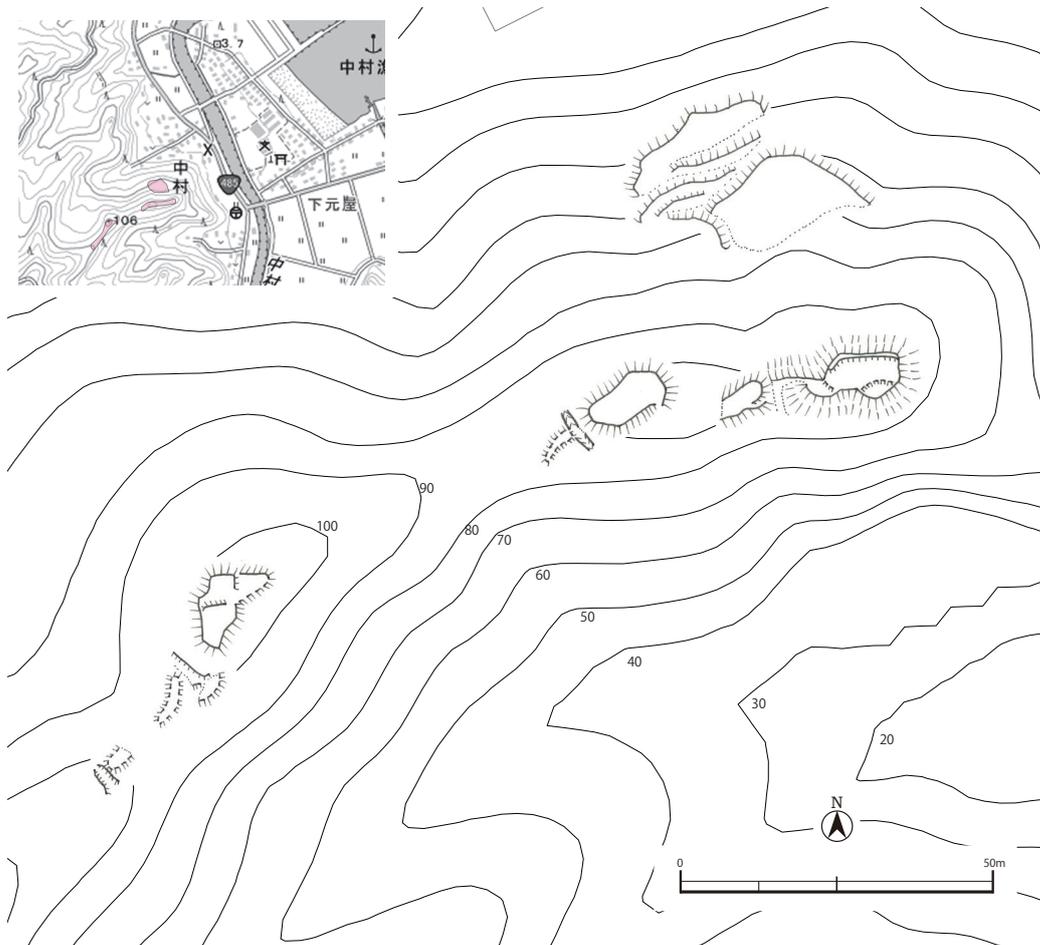
今回の調査では過去の調査において確認された遺構の再確認を行った。

③今回の調査結果を踏まえた所見

旧武良郷全体の中心の位置にあり、この地域を治める土豪の居城として、交通・海運に便利の良い位置が選ばれている。

第7表 中村城跡の遺構一覧

過去の調査で確認された主な遺構	今回の調査で確認された主な遺構
曲輪 (2ヶ所)、堀切、土塁、石垣	なし



第6図 中村城縄張図

4) 勝山城跡 (第2表 No.5)

①立地と概要

勝山城は島後の中央部である原田地区にあり、西郷、五箇、都万に通じる交通の要所に置かれている。山頂の曲輪からは国府尾城を望むことができ、相互に連絡を取り合える位置にあったことが分かる。隠岐で最も広い平野である八尾平野の北端に位置し、標高218mの山頂にいくつもの曲輪が造成されている。周囲は急峻な地形となっており、土塁を築くなど防御施設が整備されている。但馬から隠岐に逃避した尼子勝久と山中鹿介が、再起をするまでの一時期を勝山城で過ごし、勢力を整えたといわれている。

②今回の調査

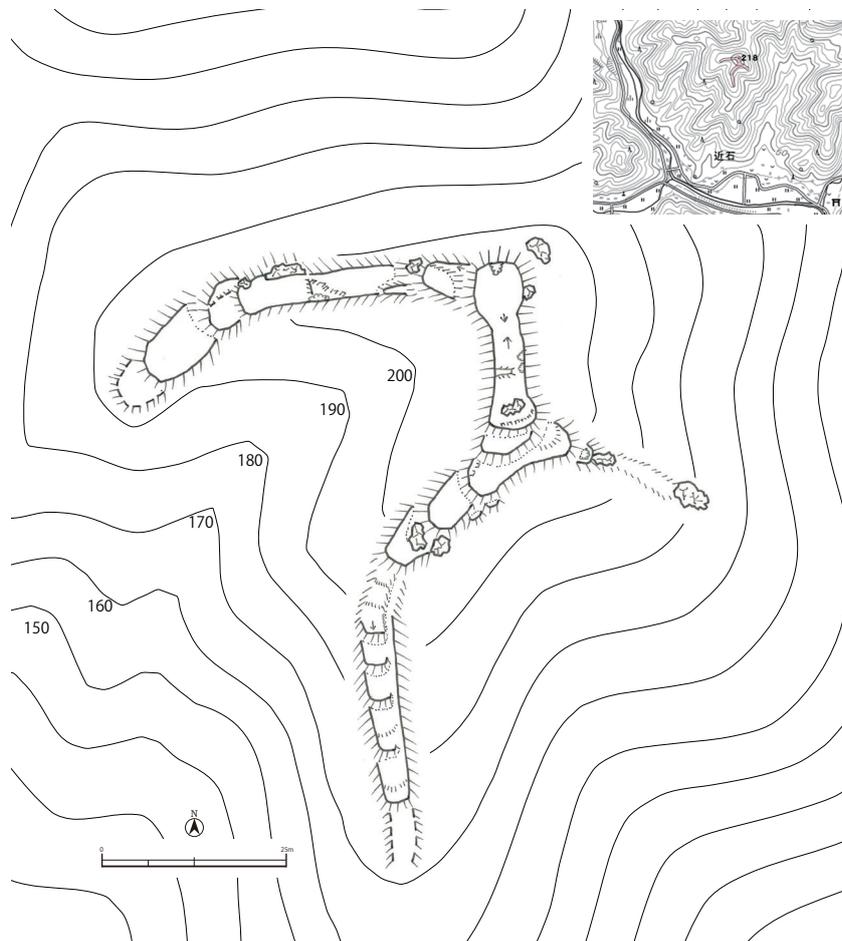
今回の調査では、山頂の曲輪から南東方向に延びる尾根と、山頂西の曲輪の南西に続く尾根に遺構がないかの確認を行った。

③今回の調査結果を踏まえた所見

数多くの曲輪が築かれ十分な普請がされているが、堀切などによる防御はない。周辺の大岩を利用し虎口状の地形を造り出している箇所も見受けられた。

第8表 勝山城跡の遺構一覧

過去の調査で確認された主な遺構	今回の調査で確認された主な遺構
曲輪、土塁、虎口状の施設	なし



第7図 勝山城縄張図

5) <sup>オオク</sup>大久城跡 (第2表 No.6)

①立地と概要

大久の山城は『隠州視聴合記』にその存在が挙げられているが、これまで所在が分からずおおまかな位置も特定できていない。地元ではジャと呼ばれる山があり、そこが山城跡であると推測できる。

②今回の調査

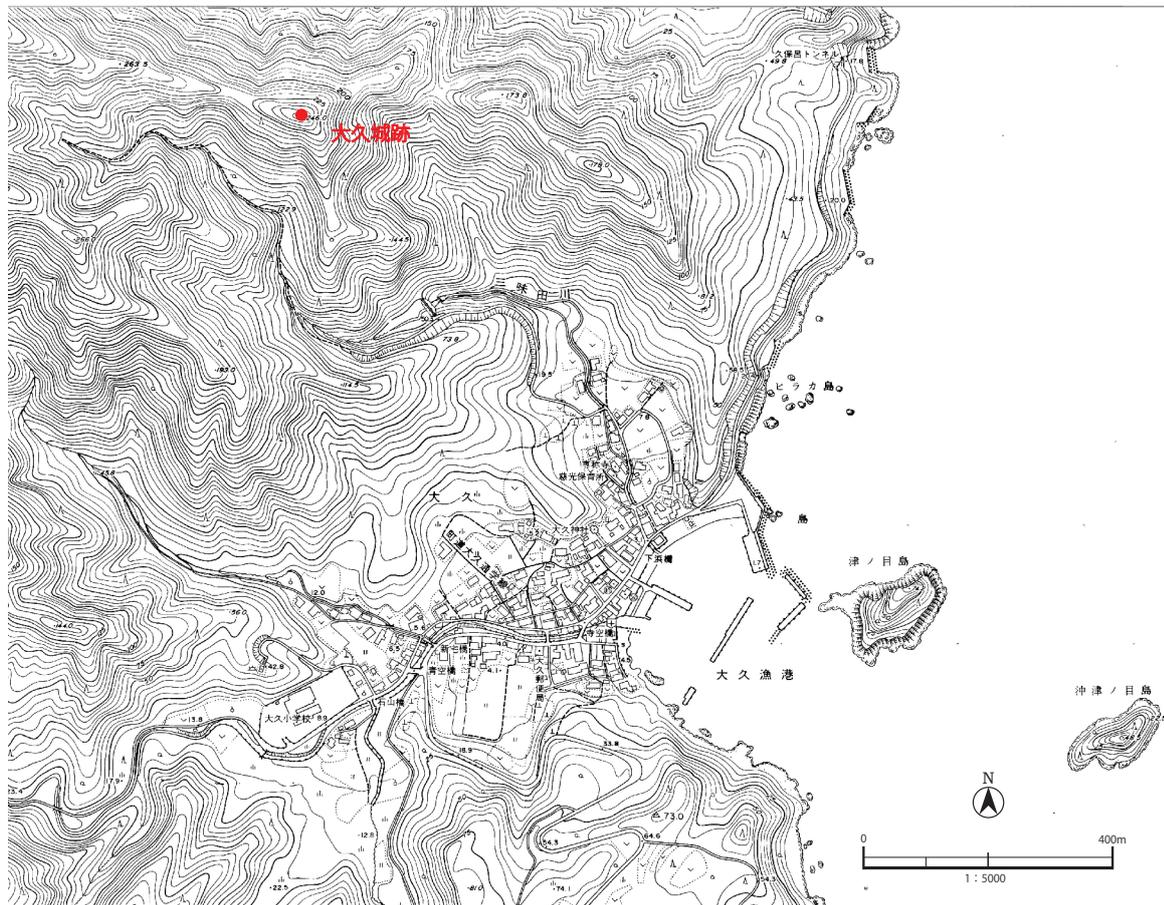
今回の事業では調査ができず、大久城の有無は確認できなかった。

③今回の調査結果を踏まえた所見

未確認のため今後の調査が必要である。『隠州視聴合記』の記述は信憑性が高いとみられるため、地元での聞き取りも含め、数回の機会を設定し調査にあたる必要がある。

第9表 大久城跡の遺構一覧

過去の調査で確認された主な遺構	今回の調査で確認された主な遺構
未確認	未確認



第8図 大久城推定位置図